



本 編

前日譚から、約半年後。

とある年の春。四月中旬の金曜日、二十二時すぎ。

日本のとある、かなり寒い地域の政令指定都市。

天気は晴れ。外の気温は十八度。

過ぎしやすくはあるが、油断すると風邪をひいてしまう気候である。

場所は、タクシーの車内。

主人公は今、自宅に向かうタクシーの後部座席で眠っている。

もちろんそこは、眠るための場所ではない。

しかし、寝てしまう人は多いのだろう。

タクシーの運転手は特に何も言わず、主人公はそれをいい事に、すやすやと眠り続けている。

だが、それももうすぐ終わりのようだ。

タクシーは主人公が指定された場所に到着し、ゆっくりと停車した。

あとはもう、主人公が目を覚まして支払いを済ませば、このドライブは終わりである。

SE1 タクシー車内の環境音

【最初から最後まで流す】

【0―5秒ほどまで流してセリフ】

【車内から音が聞こえる】

【ごく小さな音で流す】

【その後、▲1まで流し続ける】

〈タクシーの運転手〉

「優しく。眠っている客を起こすのに慣れている感じで」

お客さん。着きましたよ」

〈主人公〉

「……ふえ？」

しかし、肝心の主人公は、まだ状況がつかめていない。

起こされて尚、うとうと、ゆらゆらと揺れながら、むにやむにやと夢見心地である。

そんな頭に浮かべるのは、可愛い可愛い年下の恋人の事だ。

その人は、普段は実年齢以上に落ち着いていて、優しく、頼りがいのある、主人公にはもったいないほどの素敵な人だ。

その上家庭的で、結構押しが強く、なかなか口が達者で。

気持ちを、いつもストレートに伝えてくれる。

だから主人公は、ぐいぐい押されまくるうちにその魅力に気づき、今では、すっかり大好きになってしまった。

でも、その人には、こんな一面もある。

たとえば、人に気を遣うあまり、甘えるのがとても下手で。

困っている時に限って、本心と反対の事を言ってしまう、とても不器用なところがあつて。

さらに本当は、超が付くほどの淋しがり屋でもある。

主人公はそんな『彼女』と過ごす約七か月間で、その人柄にめちゃくちゃに夢中になり、今では、なんでもしてあげたいと思うようになってしまっている。

一見器用で、何でもそつなくこなしそうなのに……誰かに頼る事だけはうまくできない彼女の、最高の理解者になりたいと思っているのだ。

そう……。

イヴちゃん、わたしは、そんなあなたを、毎日ハグする人になりたいんです。

毎日、一瞬も不安を感じない位その心のそばにいて、何かあったら、一番に助ける人になりたいんです。

だから……だから……。

うふふ。むにやむにや……。

しかし、現実の主人公はこのざまである。

恋人のそばにいるどころか、意識を保って運転手の言葉に返事をする事さえおぼつかない。

それでも、タクシートの運転手は優しく根気強い。

今、何がどうなっているのかを、改めて説明してくれた。

〈タクシートの運転手〉

「優しくゆっくりと、状況を説明する」

マンション。着きましたよ」

〈主人公〉

「へ………？」

……あ。ああ………ありがとうございます………」

なので、こんな主人公でも、己の置かれている状況を理解した。
同時に、だんだん記憶も戻ってくる。

……あ。

そうだわたし、お酒飲んじやったから。

イヴちゃんの言いつけ通り、今日はタクシーで帰る事にしたんだった。

イヴちゃん、わたし、ちゃんと約束守ったよ。

えらーいでしょ………。

くふふふ………。

と。

主人公は現在『逢瀬（おうせ）学園』というところで保健室の先生をしており、今日は
近隣の学校の先生達と、親睦会をかねた飲み会があった。

だが、お酒を飲むつもりはなかった。

主人公は元々非常にお酒に弱い上、約半年ほど前、お酒で大変な失敗をした。

それを例の恋人……つまり『イヴちゃん』に助けられ、以来、彼女からは『極力お酒を飲まないように』『やむを得ず飲んでしまった場合は、必ずタクシーで帰宅するように』と釘を刺されているのである。

そして、今日は飲んでしまった。

なので素直に言いつけを守って、タクシーに乗って帰ってきたという訳だ。

〈タクシーの運転手〉

「優しくゆっくりと。」

主人公に対して『酔いの度合い』という点では『あまり深刻ではない』と判断している。しかし、主人公は若い女性なので『このまま一人で無事に帰れそうか』という点では心配。

「なので、万が一を考えて、このような提案をする」

大丈夫？ 一人で入れます？

ご家族いらっしゃるんでしたら、呼んで構いませんよ」

ごかく……。イヴちゃん……。

主人公『ご家族』という単語を聞いて、即座にイヴの事を思い浮かべる。
前述の通り、イヴは主人公よりもかなり年下だが、主人公よりも、遥かにしっかり者だ。
おまけに実は、主人公と同じマンションの、同じ階に住んでいる。
だから、呼べばすぐに来てくれて、きっと主人公を助けてくれる事だろう。
だが、だからといって、安易に頼るのはいけない。
ゆえに主人公は、このまま一人でマンションに戻る事にした。

〈主人公〉

「あ、いやいや、大丈夫です……。自分でなんとか、なんとかします」

〈タクシーの運転手〉

「【少し心配しつつも承諾する。】

『セキュリティのしっかりしてそうなマンションだし、大丈夫か』と判断している」
そう？　じゃあ、1280円です」

〈主人公〉

「はい、どうぞ……」

SE2 主人公が自分のシートベルトを外す音

【最初から最後まで流す】

SE3 主人公が財布のジッパーをあける音

【最初から最後まで流す】

こうして主人公は、ポケットに入れていた小さなお財布から現金を取り出し、支払いを済ませた。

今日はクレジットカードの類を持たず、お金を必要な分だけこのお財布に入れて行動している。

これは一見、お酒に弱い自分を正しく理解した上での行動に見えるが……実際は、これもイヴの提案である。

それでも主人公は得意げだ。

イヴちゃん……わたしは大丈夫だからねえ……。

今日は金曜日だもん。バイトで疲れてるイヴちゃんを、こんな事で呼び出すなんてしないよ。

ちゃんとお金も払えたし、このまま一人でちゃんと、おうちに帰れるからねえ……。
などと考えている。

〈タクシーの運転手〉

「【穏やかに受け取る】

はい。ちようどいただきます。

【少し間をあけてから。さほど驚いていない。

『やはり迎えが来たか』という感じで。

そこでマンションの自動ドアが開き、そこから一人の若い女性が出てくるのに気づいたため。

彼女がタクシーを確認するなり、迷わず手を振り始めたので、家族だと判断する」

あ、ご家族、見えたみたいですよ」

〈主人公〉

「へ？」

〈タクシーの運転手〉

「『あちらで手を振っている方』が主人公より年下の女性なので『妹だろう』と判断している。

夜で、少し距離もあるので、顔はあまりよく見えていない」
ほら、あちらで手を振ってる方。妹さんかしら」

……んん？ 妹？ 花音？

いや、多分あそこに居るのは、きっと……。

主人公、うとうとしながらも首をかしげる。

主人公には『雪城 花音（ゆきしろ かのん）』という大学生の妹がおり、ちよくちよく主人公の様子を見にやってくる。

だが、彼女は今日から旅行へ行っているはずではなかったか。
さすがに旅行先から現れるという事は、物理的にあり得ない気がするのだが……。

〈主人公〉

「ふえ？ あ、ほんとですね……」

しかし、主人公の頭は寝ている。

『多分、その人は妹ではありません』『でも、私を心配して迎えに来てくれてる人である事は間違いありません』『なんか普段と服装が違う気がします、きっと恋人です』と言おうとしたのに……。

なぜか、運転手に同意してしまった。

〈タクシーの運転手〉

「優しく。主人公が家族であると認めたので、安心する。

あとは妹と思われる女性に任せようと考える」

じゃあ、お氣をつけてお帰り下さいね。ご利用ありがとうございました」

〈主人公〉

「……はあい。ありがとうございましたあ……」

SE 4 主人公が荷物を持つ音

【最初から最後まで流す】

SE 5 タクシーの扉を開ける音

【最初から最後まで流す】

【車の内側から外に向かって開く形で聞こえる】

▲1 ここでSE1がSE6と切り替わる。

SE6 外の環境音

【最初から最後まで流す】

【小さめの音量で流す】

【▲2まで流し続ける】

SE7 主人公の足音

【最初から最後まで流す】

SE8 主人公がタクシーの扉を閉め、タクシーが去っていく音

【最初から最後まで流す】

【小さめの音量で流す】

【車の内側から外に向かって開く形で聞こえる】

SE9 主人公の足音

【最初から最後まで流す】

【流し終わったところでセリフ】

こうして運転手は誤解したまま去り、主人公は『妹ではないが、自分を心配して迎えに来てくれた人』のもとへ向かって、てくてくと歩いて行く。

このように主人公は、酔うとあらゆる能力が低下してしまう。

それでも今日までどうにか生きてこられたのは、己のぼんやりをそれなりに正しく理解し、それなりに警戒心を持って、危険な事はせずに生きてきたのと……。

単純に『非常に運がよかったから』といえるだろう。

たとえば今も、主人公は非常に運がいい。

自分の事をしっかりと理解し、支えてくれる恋人が、こんなに近くにいます。

● 中央

「『穏やかに、酔っている主人公をあやすように呼び掛ける』

おい。先生、ここ。ここ」

〈主人公〉

「イヴちゃん……♡」

SE10 主人公が駆け寄る足音

【最初から最後まで流す】

●中央

「穏やかに、酔っている主人公をあやすように返事をする。

だが内心では、主人公がすぐに気づいてくれて嬉しい」

はーい。そうだよ。イヴだよー♡

【少し間をあけてから。嬉しそうに。

主人公が自分の変装を即座に見抜いた事が嬉しい。

さすがに堂々と迎えに行く訳にはいかなないので、今日は多少の変装をして現れた。

だが、待っている途中で『もしかすると、この格好では主人公に気づいてもらえないのではないか』と思うようになり、実は少し不安だった」

すごいね、先生。すぐ私だってわかったんだ。

変装ガチすぎて気づいてもらえないかと思った」

〈主人公〉

「ふふふふ。イヴちゃんならわかるよお……♡

ありがとう。待っててくれたの？

というかすごいね。髪の毛。どうやって隠してるの？」

あー。なんか髪短くなって思ったけど、やっぱりイヴちゃんだったあ。

さすがイヴちゃん。そろそろわたしが帰ってくると思って、迎えに来てくれたんだあ。イヴちゃんはすごいなあ。

……あれっ。わたし、バイトで疲れてるイヴちゃんに迷惑かけないように、今日は一人で帰るつもりだったんだけど。ちゃんとできる所、見せるつもりだったんだけど。

……ま、いいか。

こうして主人公は、今日もイヴのペースに流された。

イヴはたいそう世話焼きな性格で『主人公に何かあってから』ではなく『主人公に何かがあるかもしれない』と判断した時点で行動してくれる。

なので、いつも、だいたい先回りをして主人公を助けてくれるのだった。

主人公はこれが嬉しくもあり申し訳なくもあり、多少は一人で頑張りたいと思っているのだが……今日はもう、酔っていてダメだった。

しらふならできる事も、全部できなくなっている。

● 中央

「満足気に。」

変装をしても自分だとわかってもらえた事が嬉しいし、酔って矢継ぎ早に質問してくる主人公が可愛い。

今日は、バイトから帰ってきて着替えるのでは間に合わないので、バイトに行く前から変装を仕込んでおくという、手の込みっぷりだった。

なので、褒められて嬉しい」

ふふふふ。

そうだよ。先生迎えに行こうと思ってね。

でも、普通の格好じやヤバイから。

【髪の毛の隠し方を実演している】

こうやって髪しまって。

私ってわかんない感じにして、ラウンジで待ってたの。
で、タクシー停まるの見えたから、来た」

〈主人公〉

「そうだったんだあ……。ありがとお、イヴちゃん……」

主人公、イヴの説明を聞いて、何度もうなずく。

主人公としては、きちんと相槌を打っているつもりだ。

だが、実際はおかしなタイミングで頭が動いており、どう見ても、今にも寝そうに揺れている人でしかない。

イヴはそんな主人公を見て小さく息をつくと、こう指摘した。

●中央

「可愛く怒る。タクシーで現れた時点で、飲酒した事を理解している。

主人公には優しくしたいが、お酒を飲んだらしい事に関してはいっさ指摘する」
「というか、先生お酒飲んだでしょ。」

足フラフラだよ」

〈主人公〉

「ごめえん……。ほんとに一杯だけだったんだけどお……」

●中央 至近距離

「優しく。『そうでしょうね』くらいの感じで、あまり呆れていない」

やっばりか。

【ちよつと呆れつつ、自分に一杯甘える主人公が可愛くて仕方ない】
もお。はいはい。おうち帰ろうねえ」

SE11 二人の足音

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【▲3まで繰り返して流す】

こうしてイヴは諭すように主人公の背中を撫でると、そのまま腕を絡めて、ゆっくりとしたペースで歩き始める。

主人公が酔ってしまった事は、彼女にとって、想定内の出来事だったようだ。

それでも主人公は申し訳ない。だが、言い訳をするのもっと残念な事になるので、謝罪をしたり、おろおろと様子をうかがったりする事しかできない。

〈主人公〉

「イヴちゃん。おこっ तरीゆ……？」

●中央 至近距離

「優しく穏やかに。実際全く怒っていない」
怒っていないよ。想像つくから。

【自分の『想像』を述べる。

それは完全に推測の域を出ないものだったが、実際には大当たりとなる」

今日の飲み会の幹事、別の学校の先生だったんでしょ？

おおかた『飲めない事うつかり伝え忘れたら、自動でお酒注文された。申し訳ないから、そのまま飲んじやった』とかじゃない？」

〈主人公〉

「そうでしゅ……。イヴちゃんはなんでもわかるねえ……」

よかったあ、イヴちゃん、わかってくれたあ。

だが、そんな主人公の不安も、イヴはすぐに払拭してしまう。

彼女はとにかく優しく、観察力に優れていて、寛容なのだ。

そんなイヴといると、主人公は今のように、己のダメさを見抜かれているだけの場合でも……ヘラヘラと嬉しくなってしまう。

こうして許してもらっている分だけ、自分も許すし、優しくしたいと強く思うのだ。

●中央 至近距離

「呆れている風だが、実際は得意げ。予想が当たって嬉しい」
やっぱりね。

「今度は、自分の『希望』を述べる。

実際は『主人公は、自力で帰ろうとしていた』だろうという事はわかっている。

だが、頼ってほしいので、希望的観測を述べる」

それでマンションまで来られたら、私呼べばいいと思って安心してたんでしよう。

「甘くからかう。少し得意げに」

先生は先生なのに甘えん坊さんだなあ」

〈主人公〉

「違うもおん……。今日は頑張って一人で帰ろうとしてたもん……」

だが、事実と違う事まで受け入れてはいけない。

主人公、今度は必死になって否定する。

これでも、改善する意思はあるのである。

少なくともイヴの事を『呼べば来てくれる便利な人』などとは、絶対に思っていないのだ！

●中央 至近距離

「甘くからかう。くすくす笑いながら。

予想が当たり、自分が正しく主人公を理解できている事がわかって嬉しい」
えー？ 一人で帰ろうとはしてたの？」

〈主人公〉

「だってイヴちゃんバイトだからあ……。迷惑かけられないと思ってえ……」

●中央 至近距離

「優しく。甘えられる事がとても嬉しい」

ふーん。迷惑かけられないと思って、頑張ってたんだ」

そんな主人公の必死の反論を、イヴはにやにやと、嬉しそうに聞いている。まるで最初から、すべてがお見通しであるかのようだ。

くすくす笑いながら主人公の左耳に唇を寄せると、甘くささやいてくる。

●●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「ひそひそと、優しくささやく」

※特に聞き手をドキツとさせるイメージでお願いします
でもいいよ。甘えても。

【特に優しく】

私には、いくらでも迷惑かけていいんだからね。

【さらっと、ナチュラルに促す】

さ、帰る」※

〈主人公〉

「うん……♡」

……ああ、イヴちゃん。今のはいけないです。
今のでめっちゃ、スイツチ入っちゃった……。

主人公、イヴの不意打ちのささやきに、胸がきゅーんと締め付けられ、身体の芯が、むずむずと熱くなってくる。

たったこれだけの事なのに、顔は熱くなり、

ああ、もつとイヴちゃんに触りたい。

もつとイヴちゃんとかくっついてたい……。

という欲望が、場にそぐわない早さと強さで、激しく湧き上がってくる。

▲2 ここでSE6がフェードアウトする。

▲3 ここでSE11がストップする。

SE12 マンションの自動扉が開く音

【最初から最後まで流す】

【前日譚05と同じ音】

SE13 マンションのオートロックを、カードキーで解除する音

【最初から最後まで流す】

【前日譚05と同じ音】

SE14 マンションのオートロックを、カードキーで解除する音2

【最初から最後まで流す】

【前日譚05と同じ音】

SE15 ロビーラウンジの環境音

【最初から最後まで流す】

【前日譚01と同じ音】

SE16 主人公とイヴが廊下を歩く音

【最初から最後まで流す】

【※少しエコーがかかる※】

【前日譚01と同じ音】

SE17 イヴがエレベーターのボタンを押す音

【最初から最後まで流す】

【前日譚01と同じ音】

SE18 エレベーターが到着する音

【最初から最後まで流す】

【前日譚01と同じ音】

SE19 エレベーターのドアが開く音

【最初から最後まで流す】

【前日譚01と同じ音】

SE20 主人公とイヴがエレベーターに乗り込む足音

【最初から最後まで流す】

SE21 エレベーターのドアが閉じる音

【最初から最後まで流す】

SE22 エレベーターの環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【小さな音量で流す】

【トラック終了まで流し続けて、フェードアウトする】

それでもどうにかエレベーターまではたどり着き、乗り込む事はできたが……。

●中央 至近距離

「少しホツとした声で。特に誰にも会わずに無事エレベーターに乗りこめたのでよーし乗れた。」

「クスクス笑いながら優しく。酔っているらしい主人公を励まそうとしている」
ほら先生、おうちまであとちよつとだよ」

〈主人公〉

「んー……♡」

SE23 主人公がイヴに抱きつく音

【最初から最後まで流す】

どんどん、衝動は高まってくる。

主人公、寄りかかるようにイヴに抱きつくと、露骨に甘えた声を出して、すりすりと身体を擦り付ける。

イヴもまた、まんざらではなさそう。だから、ますます甘えてしまう。

●中央 至近距離

「くすぐすと嬉しそうに。言葉に反して、少しも迷惑じゃない」
「こらこら、抱きつくな。ちゅーするぞ」

〈主人公〉

「しよお？ イヴちゃん、ちゅーしよ？」

●中央 至近距離

「呆れてる風だが、実際はキスする気満々」
「ええー？」

「もうさあ……ここ、エレベーターなんですけど」

〈主人公〉

「しよー？」

だから、却下されるだろう要望も、どんどん送ってしまう。

相手は真面目で、変装するほど身バレに気を付けているイヴなのだ。こんな願いを口にしたところで、通るはずがない事はわかっている。

それでも主人公は、みつともないほど媚びた声を出して、無意味なおねだりをして、彼女に甘えたかった。

本当はたいして酔ってもいないのに『お酒に酔ってしまったので、不可抗力で、こんな、普段はしないようなおねだりをしているんです』という免罪符をかざして、彼女と密着していたかった。

そう思っていると……イヴが、ふいに顔を寄せてくる。

●中央 至近距離

「呆れてる風だが、実際はキスする気満々」

そんなにちゅーしたいの？

「しれっと。でも、甘くかすれた声で」

※特に聞き手をドキッとさせるイメージでお願いします
いいよ？

【※1回※ 軽く自分からキスする。

まるで、ここが自宅であるかのように、自然に、当たり前前にキスする】

ちゅっ♡「

〈主人公〉

「……♡」

その瞬間、主人公の頭の中から、イヴ以外の全てが消える。

まるでこの世に二人だけになったかのような甘い錯覚に満たされて、イヴ以外の事を考えられなくなる。

毎日使うエレベーターの中で、イヴがキスしてきた。

この事実だけで呼吸は荒くなり、平静ではいられなくなる。だってこんなドラマみたいな展開、嬉しいに決まっている。

嬉しいだけじゃなくて、一瞬でも長引かせたくなくて、必死になる。

● 中央 至近距離

「優しく、少し楽しげに。」

お酒に酔っている主人公とキスしたのは初めてなので。

また、全くお酒の匂いも味もなかったので、主人公が約束を守ろうとした事を、キスを通じて深く理解したので」

ふふ。先生、ほんとに全然飲んでないんだね。

お酒の味とかするのかなって思ったのに」

〈主人公〉

「えー？ なんの味したあ？」

主人公が甘ったるい声で質問すると、にやにやとイヴが笑う。
それに主人公はますますドキドキして、興奮する。

●中央 至近距離

「甘く優しく。主人公に合わせて、イヴも媚びたあまあま声になっていく。
完全に、自宅にいる時のようなラブラブ、あまあまモードに入りつつある」
んー？ なんの味もしない。強いて言えば、先生の味？」

〈主人公〉

「…………………………」

もう止まらなかった。

イヴちゃんが可愛い。イヴちゃんがえっちだ。イヴちゃんと、もっとキスしたい。

主人公の思考はこの三つだけに占拠され、それ以外の事は、もうどうでもよくなっている。

だから主人公は、当然ここがどこなのかもすっかり忘れて、またキスをした。

● 中央 至近距離

「※1回※ 軽く、不意打ちで、ちゅぱつとしたキスをされる。

思わず甘ったるい声が出る」

んっ♡」

〈主人公〉

「ほんとだー。イヴちゃんの味するう♡」

主人公、止められなくなって、今イヴの口に入れたばかりの舌を見せる。
こんな事をエレベーターでしているなんて、ありえない。
でも、もったしたい。

●中央 至近距離

「声が切なげに、甘ったるくなってくる。

エレベーターという、非常に珍しい場所でキスされて、イヴもスイッチが入ってきている」

私の味した？

じゃあ、もっと舐めていいよ？

【※1回※ 軽く、ちゅぱとしたキスをされる。

先ほどのように、甘ったるい声が出る」

ん♡

【※5回※ ちゅぱちゅぱとした、水っぽいキスをされる。

回数を追うごとに、だんだん、えっちな声が出てしまう。

主人公のキスが、だんだん本気モードになってきたので」

んんうっ……あっ♡ ん♡ んー♡ ん……♡ ん♡

【※3回※ 甘ったるく、荒い呼吸をゆっくりと整える。

主人公からのキスで、完全にえっちなモードに入りつつある」

はあ、はあ、はあ……♡

【甘くからかう。余裕がなくなってきたので、これを隠したい。

余裕があるふりをする」

何。おうち入るまで我慢できなかったの？

【※1回※ 軽く、不意打ちで、ちゅぱつとしたキスをされる。

『うん』と返事をされるようにキスされたので、激しくドキドキする』

ん♡

★【※30秒※ ねちねちと、舌を絡める、甘ったるくてえっちなキスをされる。

完全に『今すぐえっちしよう』と誘われている、本気で気分になせようとしているキス。それに見事に負けて、どんだんえっちな声になる』★★★★★

んー♡ ん♡ んんう……♡ ん♡ んーんっ……♡ んー……♡ んっふ、ん、んー

♡ んうっ……♡ んちゅっ♡ ちゅっ♡ ちゅるるっ……れろっ♡

【※3回※ 甘ったるく呼吸を整える。

先ほどより、鼻息荒く、明らかに興奮してとろとろになっている』

はあ、はあ、はあ……♡

【とろっとろのえっちな声で。

かわいく非難するが、全く怒っていない。むしろ嬉しい。

なお、自分が主人公以上にすけべな事は、完全に棚に上げている』

先生のすけべ。変態。えっちすぎ。

【※1回※ 濡れた唇を濡れた唇でふさがれる、えっちなキスをされる。

『そうです。すけべで、変態で、えっちですよ』と返事されているようなキス。

抗議もむなしく、さらにえっちな事をされてしまう」

んんう………♡

★【※15秒※】キスする。鼻息荒く、はあはあしている。

今度は攻められつつも、自分からもどんどん求めるキスをする。

先ほどたっぷりいやらしいキスをされて、明らかに完堕ちしている。」★★★

んー………ふ♡ ん♡ ん♡ んんう………ちゅっ♡ ちゅっ♡ んう………♡ ちゅっ………

♡
」

主人公とイヴ、我を忘れるほどキスに夢中になり、めちやくちやに舌を絡ませ合う。
だがここで、ふいにエレベーターの音が鳴った。

SE24 エレベーターが目的階に到着する音

【最初から最後まで流す】

【SE18と同じ音】

イヴ、エレベーターの音に驚き、びくっと身を震わせる。

だが、それがかえって主人公を興奮させる要因となってしまう。

●中央 至近距離

「息づかいのみで表現する。」

エレベーターが到着した事に気づいて」

……!」

SE25 エレベーターの扉が開く音

【最初から最後まで流す】

【SE19と同じ音】

●中央 至近距離

「甘えた声で。」

本音としては、まだまだ、もっとキスしたいが、さすがに難しくなってきたので。

しかし、まるで『主人公が必死に求めてくるから仕方なくキスに応じていたが、断る理由ができたので断っている』というフリをしている」

あ。ほら。着いた。着いたからあ……♡」

〈主人公〉

「ん……? いいじゃん。もつとしよお……?」

だから主人公はまた無視して、イヴの顎を持ち上げて引き寄せる。
イヴはいいやと首を振るが、それが本心からのものではない事は、明白だ。

●中央 至近距離

「甘えた声で。少しも嫌がつてないし、反対してない」
ダメ。もおダメだからあ……♡

【※1回※ 濡れた唇を濡れた唇でふさがれる、えっちなキスをされる。

もう降りなくてはならないのにさらにダメ押しのキスをされ、もうえっちな気分が限界】
ん♡」

SE26 エレベーターの扉が閉じる音

【最初から最後まで流す】

【エレベーターの内側から聞こえる】

【SE21と同じ音】

●中央 至近距離

「【高い声で小さく喘ぐ。

腰に軽く触れただけなのだが、もう完全にえっちモードに入っているので」
あ♡

【※1回※ 露骨にえっちなキスをされる。

キスというよりも、喘いでいるようなリアクションをする」
んー♡

【※6回※ 早く、興奮気味に呼吸する。

鼻息荒く、明らかに興奮してとろとろになっている」
はあはあ。はあはあ。はあはあ♡

【高く甘ったるく、余裕のない声で。

先ほどまでは『仕方なく付き合っている』フリをしようとしていたのに、今は明らかに『一刻も早く自宅に戻ってえっちしたい』という感じで」

先生。もうやばいって……♡

【早口でえっちに、甘えた声で。もうまったく余裕がない】

だからさ、先生ん家（ち）で続きしよ？ ここじゃ見つかったらやうから……。

【※1回※ キスする。甘く、軽いキスをされる。

このキスで『いいよ♡』と承認された事を理解する」
ん♡

【早口でえっちに、甘えた声で。もうまったく余裕がない】

うちに帰ったら、好きなだけえっちなものしていいから……♡

【少し間をあけてから。ひときわえっちにお願ひする】

※特に聞き手をドキツとさせるイメージでお願いします

……ね？」

ここでフェードアウトして終了。